

04・田中さんからお礼電話

とある年の秋。『03・いわゆる、はじめての夜ってやつ』の翌日。
十月九日、土曜日、十七時ごろ。
日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。
天気は晴れ。気温は十九度程度。
今日は比較的暖かい。

場所は、主人公の自室。

主人公は今、由希乃から電話をもらい、会話しているところである。
家でボーっと昨日の事を反芻していると、着信があったのだ。

▲ ボイス加工あり

【このトラックは全編『電話加工』する】

〈由希乃〉

「【自分から主人公に電話をかけた所。

昨日同様『ちよつとヤンキーっぽいけど、とても面倒見が良くて、仕事もできるパートのおばさん』という感じで。

しかし、昨日よりさらに打ち解けている。

由希乃としては、もはや主人公は『娘と親しい女の子』『娘の恩人』に等しい存在だからである」

あ！　こんにちはー。

どーも。田中でーす」

〈主人公〉

「こんにちは！　染谷です。お電話ありがとうございます！」

主人公、

わあ！　ほんとにかけてくれたあ！

なんて丁寧な人なんだ！

昨日の夜、寝る前メッセで改めてご挨拶はしたけど、そこでおしまいかなって思ってたよ。

やっぱり大人はすごいなあ。

と、感動しつつ、緊張しついで会話を続ける。

〈由希乃〉

「**上機嫌**で。主人公が礼儀正しく丁寧で、とても好感が持てるので」
昨日はありがとね！」

〈主人公〉

「こちらこそ、昨日はありがとうございました！」

……あの、その後、お店大丈夫ですか？」

そんな主人公がまず聞きたい事は、本日の店のようすだ。

……と、その前に、まずは昨夜から今までの事を、ざっくり振り返ろう。

七緒は今日、九時からアルバイトだった。

だから主人公は、今朝七時頃に七緒と目を覚まし、七緒が作ってくれた非常においしい朝食を食べ、それから少しおしゃべりして。

八時半頃一緒に家を出て、バアドモールまで歩いて行って、職員用入り口まで七緒を送

り……。

それから、ボーツと夢見心地で帰宅し、今でも引き続きボーツとしているのである。
主人公、思う。

そう。あんなのものはや、カップルの日常そのものと言って差し支えないね。

一足飛びどころか二足飛び。いや、三足飛び位の大進展だったぜ。

はあ。わたしってば、むーちゃんがない間にすっかり大人になっちゃったなあ。

むーちゃん、戻ってきた時、新しいわたしにびっくりしないでくれよな……。

……と。

このように主人公はすっかり浮かれているが、実際は『お友達同士のお泊まり会』以上の事は一切起きていない。

あれだけしっかり握ったつもりの手も、眠っているうちにいつの間にかほどけてしまっていたし、目が覚めた時、二人は少し離れた位置で寝ていた。

だが、主人公がそれを惜しく思っておずおずと近づくなり、七緒がふいに目を開けて『おはようございます♥』と笑った時には主人公は何だかもうおかしくなりそうだったし、作ってもらった朝食は、謙遜する七緒に『そこをなんとか』と頼み込んで、思わず写真に撮ってしまった。

その後朝の鵠町を並んで歩く時も、主人公はもう店になんかつかなくていいと思ったし……自分の一挙一動に七緒が笑ったり、はしゃいだりする姿を見る度に。何度も何度も『こんなのもうカップルじゃん。桐生七緒はわたしの嫁じゃん』と、胸のどきどきが止まらなかった。

実際にはカップルも嫁も何も、二人は美少女とアライグマのコンビでしかない。

それでも、主人公はすでに恋人気取りだった。

『〇〇は俺の嫁』などという、いつか使ってみたいと思っていた、いにしえのネットスラングを使用する位、恋を知った朝は甘美だったのだ。

今朝の主人公には、見るもの聞くものすべてが、ふわふわと、きらきらと、うっとりとして見えた。

ただの陽光さえ至上の美しさと思え、主人公は秋の日差しに照らされる七緒の横顔を、息をのんで見た。

この光景をずっと見ていたい、本当に今、時が止まってもいい。そんな事を本気で思った。

そんな魔法のような時間は一人になっても続き、帰宅後母親に『あら？　もう原稿終わったの？』と聞かれるまで、主人公はアリバイ作りの事さえ忘れていた。

それをなんとか誤魔化してから、ときめきは加速する一方だ。

今だって『退勤のタイミングで七緒に一言連絡するか、しまいか』とスマホを握りしめ

ながら何分も悩んでいた所で……由希乃から連絡があったのである。

〈由希乃〉

「【昨日の迷惑客の件について述べる】

うん。平和平和。

あの客、とりあえずまだ見かけてないよ。

【少し間をあけてから。

本題に入る。由希乃自身、かなり気はやっている自覚はある。

しかし、それでも早くこの件について話したい】

そんでさあ。急で申し訳ないんだけどさあ。

あんた遊園地行きたくない？」

〈主人公〉

「ほへ？」

しかし、

なんだあ！ そっか。

桐生は今日、ひとまずあのおばさんには会わずに済んだんだ。
まずは一安心だな！ よかったよかった。

と、安堵したのも束の間。奇妙な質問が飛んでくる。

〈由希乃〉

「【ひとつ前のセリフのテンションのまま話し続ける。

主人公の奇妙なリアクションについては、まったく気にしていない。

由希乃自身、唐突である事はわかっているので。

なのでひとまず『なぜ、この質問をしたのか』について述べる。

土地名は『みのり沢』と書いて『みのりざわ』と読む」

えーっと。みのり沢（ざわ）にある『スイパ』。

【言い直す。『スイパ』という略称では伝わらないかもしれないと気づいたので】
スウィートフォレストパーク。って、わかる？」

ん？ スウィートフォレストパークって、うちの市から車で一時間位行った所にあるあれか？

だいふ昔に行ったきりだなあ……。

田中さんってば、なんで急にスイパの話なんかするんだろう。

主人公、きよとしつつも、要領を得ないなりに相槌を打つ。

ちなみに『みのり沢スイートフォレストパーク』の略称は『みのスイ』派と『スイパ』派がいるのだが、主人公と由紀乃は後者である。

〈主人公〉

「あつ、はい。知ってますよ！

遊園地とおっきい公園が一緒になってて、夏はお祭りとか、フェスとかもやってるところですよね」

〈由希乃〉

「【声が弾む。】

『ひとまずスイートフォレストパークの存在は知っているようだ』と安堵したのであ、ほんと。

【『交通系』とは『交通関係の会社』という意味】

うち旦那が交通系に勤めてただけだし。

仕事関係でもらったタダ券あんのよ。

【本当は期限などない。プレゼントするもつともらしい理由をつけただけ】

あと、みのり沢までのバス券もあんだけど、そろそろ期限切れそうなんだよね。

【内心『我ながら、ちよつとこれは唐突だ』と思いつつゴリ押す。

それ位、ぜひともスウィートフォレストパークに行ってほしいので】

昨日のお礼するって言ったじゃん？

【『あげっから』は『あげるから』という意味】

両方あげっから。行かない？」

〈主人公〉

「いいんですか？」

えっ。なににこの展開。

もしかして、デート編始まっちゃう？

主人公、由希乃の言葉に思わず浮き立ち、前のめりになる。

このように主人公が『デート』という言葉を意識した時、最初に浮かんだのは、やはり七緒の顔だった。

まだ『行かない？』以上の事を何も言われていないのに、真っ先に七緒とのひと時を空

想したのだ。

……その世界で七緒は主人公と当たり前のように腕を組もうとし、主人公はこれを、まんざらでもなく受け入れている。

——まったく桐生ってば、積極的なんだからさ。

いくらわたしたちがカップルだからって、そんなに密着されたら恥ずかしいよ。

……まあ、嫌じゃない。嫌じゃないけどな？ 全然してくれて、構わないけどな？

わたしだって、桐生の事が好き。だし。

なんなら、もっとくっついたって……。

ハッ！

いやいやいや！ カップルじゃない！ カップルじゃないから！

主人公、電話口でふんふんと首を振ると、どうにか我に返る。

すると嗅ぎなれないシヤンプーの匂いがしてそれが七緒を連想させ、ますます胸が高鳴る。

こんな風に、髪に、服に。まだ七緒の気配が残っているのがいけない。
早くも現実と妄想の境があいまいになってきている。

〈由希乃〉

「声が弾む。最低限、昨日のお礼ができそうな事は確定したので」
もちろん！

「少し間をあけてから。少し申し訳なさそうに」
でー。

「少し間をあけてから。少し申し訳なさそうに。

実を言うと『お礼をする』などと言っておきながら、実質的には『交通費と入園料分が無料になるチケットをプレゼントするので、七緒と出かけてきてくれないか』とお願いしたくて、主人公に電話してきたので」

できればなーちゃん連れてつたげてほしいんだよねえ……。どう？」

〈主人公〉

「あ。桐生さんと一緒に行ってほしいって事ですか？」

しかしここで、主人公もようやく多少冷静になった。

由希乃がなぜ電話をかけて来たのか。なぜ、唐突にスウィートフォレストパークの話をはじめたのか。それらが一気に理解できたからだ。

〈由希乃〉

「慌てて補足する。

これでは半ば強制的に『デートして来い』と頼んでいるに等しいので。

『券は二人分以上あり、つまり七緒を遊びに連れて行ってさえくれれば、人数は何人でもかまわない』という事を説明する」

あ。二人つきりじゃなくて、三人以上でもいいよ！

昨日一緒に来てた、

「ほんの一瞬だけ間が空く。

涼羽の名前がすぐに出てこなかったのだ」

久我（くが）さん！ あの子も一緒に大丈夫。

どっちの券も一杯あるからさ、

「と言ってから、無限にある訳ではないと気づく。

ひとまず、確実にあるだろう『五人分』はあると伝える。

由希乃は今、少しテンパっている」

五人位まではいけるよ。

「少し間をあけてから。少し申し訳なさそうに。でも『なーちゃんと親しいこの子なら、きつとあたしと同意見なはず！』と思いつながら話す」

あの子さあ。わかるしょ？」

〈主人公〉

「ん？」

だから、少し後になって主人公は思う。

『こんなに、電話中さえ桐生と過ごす事を妄想しちゃう位なら、もっとその気持ちをアピールしておけばよかった』と。

『こんな風に田中さんに頼まれる前から、わたしは、桐生と出かけたいと思っていたよ。って、もっと桐生に積極的に伝えればよかった』と。

〈由希乃〉

「【慌てて軌道修正する。

たった今『わかるしょ』と言ってしまったが、それだけでは説明不足であると感じたので。具体的には、主人公と七緒はまだ出会ったばかりで、七緒の多忙さを、主人公は知らないはずだと気づいたので。

『あごめん』は『あ、ごめん』がくつついた形」

あごめん。最近仲良くなったばっかなんだっけね。

【七緒の境遇について、改めて、順を追って説明する。

『ずっと』の『っ』を強調して言う」

あの子ね？ 四月にうちの店入ってからこっち、ずっと働きづめで。

『いつ遊んでんの？ ていうか寝てんの？』みたいな感じなんだ。

この前珍しく休んだけど……半年働いてて、ほんっとその時位でさあ。

だから心配で。慰安旅行、的な？

たまにはどっか出かけてリフレッシュしてほしいって思ってたんだ。

【少ししゅんとして。

実は、前にも同じような事をして、やんわりと断られてしまった事があるので。

実は繊細な由希乃は、今でもその時の事が若干トラウマ。

なので、リトライを誓いつつも、なかなか実行できずにいた」

でも、直接券あげても断られそうでさあ……」

〈主人公〉

「あー。なるほど……。そういう事だったんですね……」

主人公、色々と合点がたって、思わず電話口でこくこくと頷く。

確かに七緒は昨日、由希乃にどこか遠慮しているように見えたからだ。

……うんうん。

親切にされすぎると『こんなにもいいのかな？』って、かえって不安になっちゃうものだよな。

でも、わたしは田中さんの気持ちもわかるな。

四月って事は、桐生はうちの学校に入学してから、ずっとほぼ休みなしで働いてるって事だろ？

わたしが田中さんだったら『一日位遊びに行ってきたよお』って気持ちになるかも。ていうか、田中さんじゃなくても、なるよ。

〈由希乃〉

「【少し前のめりになる。主人公が同意してくれそうなので】
わかるしよ？

でも、あんたからだったら違うかなあ？　って思ったんだ」

〈主人公〉

「え？」

と。

このように主人公が一人納得していると、さらに主人公をドキドキさせる言葉が飛んでくる。

由希乃という第三者にまで、自分達はそのように認識されている。

そう思うだけで、心臓がバクバクしてしまう。

〈由希乃〉

「『なぜ』主人公からの誘いなら、七緒は応じるだろうと思ったのか』について説明する。そのためにはまず『七緒がいかにもてるか』という話になる。

また、これは『なぜ由希乃が、毎回七緒を送って行くようになったのか』についての説明でもある」

ほら。あの子可愛いからさあ。

この辺の学校の子とか、よくなーちゃん目当てに来るし、結構告られたりもしてんだ？でも、ぜーんぜん興味示さないっていうか。

ただ『困ってます』って感じだったんだよね。

でも、あんたの事はすごい好きみたいだし。

あんたの言う事だったら、聞いてくれるんじゃないかなあって思ったんだよね。

【少し間をあけてから。】

しかし、ここまで言った所でふと我に返り、途端に反省し始める。

自分はもういい歳なのに、一度失敗した位でくじける方がおかしい。

もう一度勇気を出して七緒に『休んでおいで！』と言えればいい。

であるにもかかわらず『年下の、その上最近七緒と知り合ったばかりの主人公に頼むなんて、どうかしている……！ 自分はなんてダメな大人なんだ！』 と思い始め、急に自分が情けなくなる」

……いや、ごめん。あたしが自分で言えって話だよ。

【『自由に使ってくれていいから』と言おうとしたところで、主人公が返事をし、言葉が途切れる】

やっぱ、券はあんたが自由に……」

〈主人公〉

「わかりました！」

〈由希乃〉

「【素で驚く。驚きのあまり、一瞬、何を言われているのかわからなくなったので。

『わかりました』とは文脈からして『話はわかりました。では、自分が誘ってみましょう』の略だと考えればわかるのに、それすらも飛んでしまう」

えっ!!」

元氣よく主人公が答えると、由希乃が驚く。

だから主人公も驚き、多分二人は今、それぞれ別の場所でびっくり顔を浮かべていた事だろう。

しかし二人の会話は、ここから一気に熱を帯び始める。

主人公が燃えているからだ。

〈主人公〉

「そういう事でしたら、ぜひご協力します。

実はその、田中さんのおっしゃる通り、わたしと桐生さんてほんと、知り合ってからまだ日が浅くて。

そんなに忙しくしてるって事も、実は今知ったってレベルなんですけど……。

それが本当なら、わたしも、桐生さんには少し休んでほしいです。

それに……個人的にも、一緒に遊びに行きたい、ですし。

だから、ぜひご協力させて下さい!」

〈由希乃〉

「【大感激して。とても前のめりになって】

いいの!! お願ひ！」

〈主人公〉

「……あ、でも、わたしもまだ、桐生さんと仲良くなってほんと間もないんで。聞いてもらえるかはちよつと、自信ないんですけど……」

〈由希乃〉

「【慌てて『それはもちろん理解している。たとえ失敗したとして、主人公の責任ではないとわかってる』という自分の気持ちを伝える】

うんうん。わかつてるわかつてる。

あんたが誘ってもダメならそれはもうしょうがないけど。

誘ってくれるだけでもほんと助かる！」

主人公がちよつと弱気になると、由希乃が手厚く励ます。

このように、まだ三回しか話した事のない二人は、意外なほど相性がよく、また、気が合った。

それは、七緒を通じて生まれた、新たな発見と言ってもいいかもしれなかった。

〈由希乃〉

「【少し間をあけてから。

照れ笑いしながら、主人公にお礼を言う。

自分達が同じ気持ちでいて、主人公が自分に協力してくれる事が嬉しい】

あたしもたまにはさあ。あの子にお金の事気にせず遊んで欲しい訳。

だから嬉しいよ。ありがとう。

【少し間をあけてから。

慌てて提案する。

しかし『自分がお膳立てした』とバレると、七緒は喜ばない気がすると気づいたので】

あ、後（あと）さ。あたしからもらったってのは言わなくていいからね。

あんたが用意したって事にした方が。

なーちゃんも絶対喜ぶと思うんだ？」

〈主人公〉

「そうですか？」

だが、盛り上がる二人は、少々思慮に欠けていた。

なぜ由希乃は、一回目の誘いで七緒に断られてしまったのか。これについて、深く考えていなかったのである。

〈由希乃〉

「強く同意して。

この件に関しては『仕掛け人に徹したい』と思っている」

そうだよ！ 絶対そう！

「ここで話題を変える。

そもそも急いで主人公に電話したのは『たとえ券を渡した所で、シフトを組む前に休み申請を出さないと、そもそも土日休み取れないじゃん』と気づいたためなので。

『今月下旬』とは『十月下旬』という意味」

でね？ あたしシフトも作ってんだけど。今月下旬のはまだできてないんだ？
つまり、ギリ余裕あるから。まだ休み希望出せんのよ。

「内心申し訳なく思いつつ、念を押す。

やはり、主人公達よりもずっと年上でありながら、この計画を主人公頼りにしている事に罪悪感が残っている」

だからそれまでに誘ってみてもらえと、助かる」

〈主人公〉

「つまり、田中さんから券を受け取ったら、できるだけ早く桐生さんを誘って。

十月下旬の休み希望提出日に間に合うように、予定組んでくれて感じてすよね？」

しかし、二人はすでに具体的な日取りの事しか考えていない。

桐生七緒という女性が結構面倒くさく、複雑な気質を持っているという事をすっかり忘れ『デートをいかに取り付けるか』ばかりに夢中になっている。

〈由希乃〉

「【声が弾む。主人公が正しく事態を理解してくれているので。

『はあ、さすが鵠の子！ 頭いいんだなあ！』と知っている。

なので『ギリギリ間に合う休み希望提出日』について補足する。

しかし、これは由希乃にとって、かなり無理なスケジュールである。

それでも主人公に、可能な限り猶予を持たせたい」

そう！ えーっと。今日は土曜……九日（ここのか）でしょ。

十一……いや、十二日までに出してくれたら間に合わせるから。

あんたはそれまでに、誘ってみてもらえと、助かる。

【少し間をあけてから。改めて頼み込む】

どうかよろしく頼みます！

【少し間をあけてから。

とにもかくにも、まずは券を渡さないと始まらないと思ったので。

実際は必ずしもそんな事はないのだが、由希乃はすっかり気がはやっている】
そしたらさ。まずは券あげんね？

【少し間をあけてから。適切なタイミングを考えて、提案する。

『誘う事自体は今日からもうできるだろうし、月曜日にも、七緒に見つからないようにどこかで会うのはどうか。今日……土曜日はもう遅いし、日曜日は同様にパートがある。

だからこちらから時間指定する形になってしまっただけで申し訳ない』と言いたい】
そうだな……月曜にでもどっかで待ち合わせるか。

明日もパートあるからさ。こっちから指定しちやって申し訳ないんだけど」

〈主人公〉

「あの」

〈由希乃〉

「【きょんとして。主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので】
ん？」

ゆえに、二人は暴走する。

例えばここに涼羽がいたら、もう少し事態は変わっていただろうが……いないので、止まらない。

〈主人公〉

「今日はもう、お仕事終わりですか？

わたし、今日はもう用事ありませんから。よかったらこちらからお伺いしますよ」

〈由希乃〉

「声が弾む。主人公があまりにも乗り気なので。

七緒が気に入っている人物が、自分にとっても好ましい人物であると感じ、ますます主人公の事が好きになったので」

え。これからすぐでもいいの？ 助かるー！

あんたほんつといい子だね！

「ひとまず先ほどの質問に答える。

『すぐ』とは言ったものの、『すぐ』には難しい事に気づいたので」
えっとね。今休憩中なんだけど、七時に終わるからさ。

そのあと車で家まで行くよ。どこら辺住んでんの？」

〈主人公〉

「あ、ほんとですか！　ありがとうございます！」

えっと、鵜町の東友わかります？　あの辺りなんですけど……」

〈由希乃〉

「あ。わかるよ。じゃあ、仕事終わったらまた連絡すんね」

〈主人公〉

「承知しました！　じゃあ、メッセにも住所と地図送っておきますね」

〈由希乃〉

「お。地図送っといってくれんの？　助かるー！

ほんとありがとね。じゃあまた後で！」

こうして二人は、秘密の計画を共有する仲間となった。
その実行は、今週末以降。

だけどその日、この決断が何をもたらすのかを……当然ながら、主人公も、由希乃もまだ知らない。

〈主人公〉

「はい！ お待ちしてます。
それじゃあ……一度失礼します！」

だから主人公は、ただドキドキ、ワクワクしながら電話を切る。
由希乃の声もそれに応え、ウキウキと弾んでいる。
また何も知らない二人の、平和な夕方の事だった。

〈由希乃〉

「【弾んだ声で。すべてがうまく生きそうで嬉しい】
はーい。失礼しまーす！」

ここでフェードアウトして終了。